

<研究ノート>

幼児に対するピアノ指導法の検討

Examination of the Piano Instruction Method for Children

伊藤 仁美 ITO Satomi 堀江 志磨 HORIE Shima

本研究の目的は幼児の音楽的な発達と特性を踏まえた上で、のぞましい幼児のピアノ指導法を検討することである。幼児を取り巻く音楽的環境と音楽的発達には大きな相関関係があり、適切な指導によって幼児の音楽的資質を伸長する。ピアノ指導コース推奨科目「ピアノ指導研究入門」における模擬レッスンでは、学生同士でレッスンを評価し合った。その結果、学生のコメント記述内容と本コースの学びのシステムで育てたい6つの力には複数の共通点が見受けられた。特にコミュニケーション力と言語表現力についての見解が多く寄せられた。また良い評価が集まった模擬レッスンではピアノ指導技術、ピアノ演奏技術、ピアノ教材知識の伝達がバランスよく行われていることが分かった。つまり指導者は十分なピアノ指導技術、演奏技術を習得した上で円滑なコミュニケーションを取りつつ、対象者に効果的な言語表現力でレッスンを展開することの重要性が明らかになった。

キーワード：幼児のピアノ指導法、幼児の音楽発達、模擬レッスン、コミュニケーション力、言語表現力

1. はじめに

本研究は幼児の音楽的な発達と特性を踏まえた上で、のぞましいピアノ指導法を検討することを目的とする。戦後わが国では高度経済成長と共に、地域社会や家庭教育の中でピアノを習う子どもが増加している。学校教育において音楽を学ぶだけでなく、学校外の様々なフィールドでピアノ教育に触れることは、生涯にわたって音楽を愛好する心情を培う機会となり人格形成にも寄与する貴重な機会である。このことを鑑みると、ピアノ指導者はレッスンを通して子どもの音楽能力の伸長や音楽性のみならず、人間性の涵養に大きく貢献する存在であることを、十分に意識する必要がある。

では幼児のピアノ指導法にはどのような視座が求められるだろうか。丹羽（2019）は、ピアノを演奏するためには視知覚や聴知覚などの知覚作用を鍛え、音楽を総合的に習得することが欠かせない⁽¹⁾、と述べている。そのため幼い頃から手の形や鍵盤に触れる指の置き方を指導するといった、いわゆるテクニックの指導はひいては音楽的かつ効率よく弾けるようにするために必須であると論じている。ピアノを演奏するには基本的な音楽知識、技能を踏まえた上で音楽を感受し、身体をコントロールしつつ自分が表現したいと思う音を奏でることが求められる。幼児はピアノによる豊かな音楽体験を通して五感の全てを働かせ、感性と表現の発達を促進していく。その際大切なのは本人がピアノを弾くことを楽しいと感じ、ピアノ演奏を通じた幸福感を味わうことである。そのため幼児を対象としたレッスンでは、ピアノ指導者が幼児と音楽の関わりについて理解し、適切な言葉がけや指導における創意工夫が必須である。そこで本稿では、幼児が音楽の様々な仕組みや特徴に気づき、音楽的理解を深めた上で、表現活動へといざなうことのできるピアノ指導法のあり方について考察する。具体的には、幼児の音楽発達を概観した上で、本学のピアノ指導コース推奨科目である「ピアノ指導研究入門」の授業実践を通して、幼児に対するピアノ指導法の一考を投じたい。

2. 幼児の音楽発達

幼児は音楽に対してどのように感応し、音楽的資質を高めていくのだろうか。アメリカを代表する幼児音楽教育者、マクドナルド&サイモンズ（1989）の研究に依拠しながら幼児の音楽発達の特性について概観していく。

マクドナルド&サイモンズによると2、3歳児の子どもには幅広い範囲の適切な教材を用いた探究的な音楽アプローチが必要だという。幼児期の頃から豊かな音楽環境に身を置くことで、やがて概念的な音楽理解の発達に繋がるのである。この年齢の子どもは単純なリズム楽器等で自由に遊ぶことを好み、リズム楽器や身の回りにあるひびきを探究する。また印刷された楽譜あるいは楽譜のようなものを、音楽であると識別することも出来る。さらに自分自身の声の表現の可能性を探究し、音楽や環境にあるひびきに耳を傾けることを楽しむ、という。

4、5歳児になると社会的意識がより高まっていく。この頃はグループでの音楽活動を楽しみつつ、響きに対する個人的な探究機会にも多く恵まれる。音楽と動きの同期を通してビート、テンポ、デュナーミク、ピッチ、フレーズなどを認識していく。この時期は歌う、音楽に合わせて動く、楽器を演奏する等の音楽活動を楽しむ態度を身につけていく。

幼児は様々な音や音楽と出会い、それらを注意深く傾聴する。やがて感じたこと、気づいたことを発達に応じて歌ったり、音楽と動きで同期したり、楽器を鳴らす、弾くといった音楽行為を楽しむのである。その際幼児を取り巻く音楽的環境と幼児の音楽的発達に相関関係があることは明らかだといえよう。さらに計画的な指導や支援によって、幼児の音楽的資質をより発達させることも明らかになってきている。幼児にとってピアノレッスンで出会う指導者の存在は重要であり、指導者の佇まい、教え方や言動は幼児の音楽的価値観にも大きく作用するといえよう。

3. 良い音楽教師とは

マクドナルド&サイモンズは幼児期の音楽活動における良い教師像についても言及している。まず良い音楽教師には、教師自身の音楽演奏スキルが必須であることを述べている。正しくなめらかに歌うスキル、楽器を演奏するスキルは音楽指導を効果的なものにする、という。さらに教師が教えるべき音楽的概念や音楽の諸要素をはっきりと見分け、効果的な指導法を生み出す重要性を説いている。また対象となる子どもの音楽的、社会的、身体的、認知的発達の段階についての見識を持っていることを良い音楽教師の条件に挙げている。幼児にとって相応しい音楽環境を創りだすのは教師の役割だとしている。そして何よりも子ども一人ひとりを独立した一個人の人間として尊重し、子ども理解につとめなければならない、と示している。

また楽器の演奏は創造的な活動になり得る、という。チョクシーは教師の役目は創造性を育てる機会を与えること⁽²⁾、と述べている。いつも教師からアイデアを注入するのではなく、アイデアが子どもの経験から引き出される重要性を説いている。このことはいわゆる、教師による「教え込み、詰め込み指導」への弊害を憂慮しているといえよう。楽器演奏が創造的な活動になるためには、教師自身が創造的に教えることの必要性を示唆している。幼児教育において創造性は直接教え込むことはできないが、教師の導きによって育成されるもの、と締め括っている。

4. 「ピアノ指導研究入門」における幼児のピアノ指導法へのアプローチ

(1) ピアノ指導コースの概要

本節では、本学ピアノ指導コースの推奨科目である「ピアノ指導研究入門」における授業実践を通じて、幼児のピアノ指導法へのアプローチを提起する。はじめにピアノ指導コースにおける学びのシステムについて概要を述べる。

本コースでは①ピアノ指導技術、②ピアノ演奏技術、③ピアノ教材知識、④コンサートの企画・運営、⑤コミュニケーション力、⑥言語表現力、の6つの力を育成することを学びのシステムとして掲げている⁽³⁾。コー

スでの様々な授業に加え、指導実習では学生自らが教えることで、ピアノ指導力を高めていく。本コースの教育的意義に関しては進藤、堀江、近藤、濱尾、大島、山内（2016）らの研究に詳しい。進藤・堀江他によるとピアノ指導コースの教育目的は、以下の通りである。

ピアノ指導コースの目的は、すぐれた演奏能力と指導能力を兼ね備えた人間性豊かな指導者を育成することである。学生は、2年間かけて一人の生徒を責任もって指導する。その指導実習を通して、生徒と保護者と信頼関係を築きながら、適切な指導のあり方を探究し、生徒を育成する。連弾演奏発表などの演奏経験や教材研究、指導実習や指導研究、並びに学生が自主的に企画・運営する発表会等の行事を通して、社会で自立して活躍できる人材を育てる⁽⁴⁾。

本コースのカリキュラムには、①スクーリングとクラス授業、②合同授業（特別講座を含む）、③行事の企画と運営、④指導実習（訪問レッスン）、の4つの学びが配置されている⁽⁵⁾。これらが縦断的、横断的に関わりながら上記に示した目的到達に向けて、多角的な学びを積み重ねている。本コースでは2年次前期に「ピアノ教材研究概論」、後期に「ピアノ指導研究入門」の2つが推奨科目として設置されている。さらに3年次前期になると「ピアノ指導研究Ⅰ」、「ピアノ教材研究Ⅰ」、後期では「ピアノ指導研究Ⅱ」、「ピアノ教材研究Ⅱ」の授業履修が設定されている。4年次前期は「ピアノ指導研究Ⅲ」、後期は「ピアノ指導研究Ⅳ」がそれぞれ設定されている。

(2) 「ピアノ指導研究入門」における授業実践

「ピアノ指導研究入門」は3名の教員で担当し、各自シラバスに則って授業を行っている。本稿では、筆者が担当したクラスにおける「ピアノ指導研究入門」の授業実践を整理していく。

シラバスにおける本授業の目標は「質の高いピアノ指導者をめざすため、演奏実習を通して、脱力、様々な音色とタッチ、楽曲の構造、限定版と解釈版の比較、時代背景など、指導の基礎となる事項を再確認するとともに、適切な批評眼とコミュニケーション能力を磨く」⁽⁶⁾と記載されている。そのため授業内容では随時、子ども対象のピアノ教材に触れ、レパートリーを広げることに繋げている。

本授業における全体の流れは以下、表1の通りである。

表1：「ピアノ指導研究入門」における筆者の授業計画

授業回とタイトル	内容
第1回：導入	授業の進め方、ガイダンス
第2回：バッハ①	《インヴェンションとシンフォニア》 ポリフォニー作品のテクニック、練習方法の意見交換、ポイントレッスン（4人グループ）。
第3回：楽器学資料館見学	バロック以降の鍵盤楽器についての知識を深める。
第4回：バッハ②	《インヴェンションとシンフォニア》 ポリフォニー作品のテクニック、練習方法の意見交換、ポイントレッスン（4人グループ）。
第5回：シューマン①	《ユーゲントアルバム》 ロマン派の表現法とテクニック、練習方法の意見交換、ポイントレッスン（3人グループ）。
第6回：ビデオ視聴	『ピアノ奏法DVD』（井上直幸編著、2005）の視聴。（他のクラスと合同）

第7回：シューマン②	《ユーゲントアルバム》 ロマン派の表現法とテクニック、練習方法の意見交換、ポイントレッスン（3人グループ）。
第8回：カバレフスキー①	《子どものためのピアノ小曲集》 近現代の小品の表現法とテクニック、練習方法の意見交換、曲の半分を使用したレッスン（3人グループ）。
第9回：カバレフスキー②	《こどものためのピアノ小曲集》 近現代の小品の表現法とテクニック、練習方法の意見交換、曲の半分を使用したレッスン（3人グループ）。
第10回：ビデオ視聴	海外の著名なピアニスト・教育者のレッスンビデオの視聴。（他のクラスと合同）
第11回：ソナチネ①	ペアになり指導者と生徒役に分かれて模擬レッスンの事前練習。
第12回：ソナチネ②	ペアになり指導者と生徒役に分かれて模擬レッスンの事前練習。
第13回：小品、模擬レッスン①	模擬レッスンによるロールプレイ。
第14回：小品、模擬レッスン② 講評（コメント）	模擬レッスンによるロールプレイおよび学生同士による講評。
第15回：まとめ	

授業の第2回～第9回ではバッハ、シューマン、カバレフスキーの楽曲を形式と表現の両面から分析し、指導ポイントを話し合う。また第6回、第10回の授業で海外の著名なピアノ・教育者のピアノレッスンを視聴することで、指導者の佇まい、レッスンの実践方法、生徒の音楽表現力がより豊かになるような適切な言葉かけ等を学ぶ。さらに授業の後半（第11回～第14回）では、学生同士が指導者役と生徒役に分かれ、模擬レッスンを行うことで実践的な指導力を育み、ピアノ指導者に必要とされる教授技術の習得を図っている。これらの学びを通して受講者は最終的に子どもに伝わる言葉を用いて1人でレッスンができるようになる指導力を身につけることを、学習の達成目標としている。

(3) 第13回、第14回における模擬レッスンの意義

次に表1における第13回と第14回の授業内容について抽出し、考察を加えていく。

はじめに模擬レッスンを行うことの意義を確認しておきたい。本コースでは「ピアノ指導研究Ⅰ～Ⅳ」におけるスクーリング（毎週の訪問レッスンの他に大学において、数名の学生と教員の前で公開レッスンを行うもの）の中で、実際に子ども達にピアノを教える。その事前学習として「ピアノ指導研究入門」の授業では学生同士が指導者役と生徒役に分かれて模擬レッスンを行い、疑似体験としてピアノを教える感覚を掴むことをねらいとしている。また模擬レッスンを行うことによって、ピアノ指導の現場で必要とされる教育実践を省察する力を育成することも意図されている。

(4) 模擬レッスンの実施方法

指導初心者である学生たちにとって最初から全曲の指導することは難しい。したがって模擬レッスンに至るまでに小さなステップを踏み、最終的に学期末の模擬レッスンに繋げていく。授業の最初は4人グループになり楽曲の特徴や演奏する際に必要なテクニック、指導方法などについて具体的な意見交換を行ったのち、数小節単位で指導を試みる。これをポイントレッスンと称する。ここまでが表1における第2回～第7回の授業内容に該

当する。その後、次第にグループ人数を絞り指導部分を増やし、学生同士の意見交換をしながら全曲の指導に繋げていく。これは表1における第8回～第12回の授業内容に該当する。

模擬レッスンでは学生同士がペアになり一人が指導者役、もう一人が生徒役を担当する。課題曲は模擬レッスンの前週に指導者の学生に与える。この際指導内容のポイントがあまりに多岐に渡らぬよう、1ページ程度の初級作品を取り上げる。その際一人ひとりの学生に違う曲を割り振り、クラス全体で楽曲の時代様式が偏らないなどの配慮をする。一人当たりのレッスン時間は15～20分程度とし、指導者役は課題曲を視聴、試弾したのち指導目標を決める。その上で具体的な指導ポイントを、生徒役に向けて分かりやすく伝えられるようあらかじめ考えてくる。模擬レッスンは指導者役学生にとり、初めての一人での公開レッスンとなるため緊張を強いられる。細かくレッスンの内容を決めてしまうと学生はそれに頼ってレッスンをしようとする傾向がある。そのため生徒が演奏したことに対して教師が反応する、といったいわゆる通常のレッスンの現場で実際に行われている応答的、即興的なやりとりをおさなりにしてしまう可能性が高いので、あえて細かい指導案を書かせることはしない。

模擬レッスンの進め方は、指導者役の学生に任せ教員は口を挟まない。指導者役は生徒役の演奏に対して、自身の指導目標を達成させるべく、実演と発話でレッスンを進める。

他の学生たちは生徒役の学生が演奏する曲の楽譜を見ながらその様子を見学し、コメント表に記入する。模擬レッスンに際し、筆者が作成したコメント表を以下の表2に示す。

表2：模擬レッスンコメント表（筆者作成）

ピアノ指導研究入門 模擬レッスンコメント表		
レッスン担当氏名		
声の大きさ	改善が必要 _____	普通 _____ とても良い _____
話す速度 レッスンのテンポ	遅すぎ _____	普通 _____ 速すぎ _____
コミュニケーション (生徒との)	改善が必要 _____	普通 _____ とても良い _____
言葉使い	くだけ過ぎ _____	普通 _____ 難しい言葉を使い過ぎ _____
説明と実習の割合	実習が多すぎ _____	普通 _____ 説明が多すぎ _____
音楽的指示は？	不足 _____	普通 _____ 充分 _____
テクニックの 指示は？	不足 _____	普通 _____ 充分 _____
曲の形式の 指示は？	不足 _____	普通 _____ 充分 _____
総合評価	1 _____	5 _____ 10 _____
レッソンの内容について、進め方について、その他こうしたらいいのでは・・・などのコメント。		

表2をみていく。学生は指導者役の模擬レッスンを観察し、①声の大きさ、②話す速度、レッスンのテンポ、③コミュニケーション、④言葉使い、⑤説明と実習の割合、⑥音楽的指示、⑦テクニックの指示、⑧曲の形式の指示、の8項目を評価する。また総合評価と自由記述欄にコメントを記入し、指導者役の学生に渡す。

(5) 模擬レッスンコメント表の結果

模擬レッスンに寄せられたコメントの一部を以下の表3に記す。

表3：模擬レッスンに寄せられた学生同士によるコメント（抜粋）

良い点	改善点
①レッスンの進め方のテンポが良い。間を空けず反応できる。	①説明が長い。
②生徒役の様子を見て話しかけている。	②同じことを繰り返し話す癖がある。
③弾かせながら、どんどん指示ができていく。	③声のトーンが暗く、平坦である。
④生徒役に考えさせる発問をしている。	④生徒に直してほしいことと、説明のイメージが見合っていない。
⑤曲の背景、題名への言及がある。	⑤指導者役の反応が遅く、沈黙が多い。
⑥和音の弾き方が、テクニックからのアプローチとイメージからのアプローチの両方がある。	⑥難しい言葉を多用する。
⑦模範演奏がきちんと弾けている。	⑦自信がないような言葉がけが多い。

表3をみていこう。はじめに良い点の項目における①は、声の大きさや話す速度、レッスンのテンポに関する言及である。観察者は良いレッスンの進め方はリズムカルであるということを見取っている。②、③のコメントではコミュニケーションが円滑に取れていることで、レッスンに互恵的なやりとりが生まれることを示唆している。④のコメントからは指導者が一方的に教えるのではなく、主体的かつ対話的な学びの有用性についての気づきである。⑤、⑥、⑦は指導者役の楽曲理解、音楽的解釈および指導法に関するコメントである。特に⑥については、テクニックとイメージの両面から和音奏法を提示している良さを述べている。この視点は幼児のピアノ指導法において大変重要であろう。幼児にとってどのように身体をコントロールして美しい音を出すかを伝えると共に、弾こうとする音の響きに対して豊かなイメージを持つことで音楽を表現することが出来るからである。

次に改善点の項目についてみていく。改善点の項目における①、②、③、④、⑥、⑦は全て指導者役の言いまわしや言葉の選択と指導者役の佇まいに関するコメントである。幼児が理解できる語彙の範囲は大人とは異なり、指導者役は幼児の言語発達も念頭に置きながら文章表現をする必要がある。その際、③にあるように抑揚がなく暗い響きの声だと伝わりにくい、ということを観取しているのは意義深い。改善点の項目⑤のコメントは良い点の項目①と対極している。すなわち、のぞましいピアノレッスンには指導者役の伝わりやすい声、語彙力、文章表現力、伝達表現力が必須であることを、受講生たちは模擬レッスンを通して学んだといえよう。改善点のコメントには音楽的指示に関するものが見当たらなかった。これは、レッスンでいくら有用な指示をしても、それを伝える力、コミュニケーション力が欠如していると意味をなさない、ということへの気づきである。

以上、模擬レッスンに寄せられた代表的なコメントを良い点と改善点に分けて表3にまとめて検証した。本節の最後に、学生が指摘しなかった課題点について筆者の所感を記す。模擬レッスンでは同じ項目をずっと指導し続けたり、出来ていないのに出来ているかのように褒めることが見受けられた。これは指導初心者ゆえの自信のなさ、不安さがそうさせているのかも知れない。また聴覚、視覚、触覚など五感をバランスよく使って指導できないケースもあった。具体的には模範演奏をしない、ジェスチャーなどを使って説明を効果的に行わない、生徒

役の身体に一切触れない、などである。また一回の指摘で多くのポイントを述べてしまうケースも見受けられた。表3のコメントと合わせて鑑みると、指導者には、語彙力の豊富さ、指導内容に対して複数のアプローチが出来ること、生徒との円滑なコミュニケーション力が求められるといえる。

5. おわりに

本稿ではマクドナルド&サイモンズの研究に依拠しつつ幼児の音楽発達と、良い音楽教師像について概観した。次に「ピアノ指導研究入門」での模擬レッスンに寄せられた学生のコメントを通して、幼児のピアノ指導に必要とされる力を検証した。本研究で明らかになったことをあらためて総括していく。

幼児は様々な音や音楽と出会い、やがて感じたこと、気づいたことを発達に応じて歌ったり、音楽と動きで同期したり、楽器を鳴らす、弾くといった音楽活動を楽しんでいく。その際教師が対象となる幼児の発達や特性をよく分かった上で計画的な指導にあたることが重要であり、教師の導き方によって幼児の音楽活動の質が大きく作用されるのである。つまりピアノ指導者は幼児にとって影響力を持つ存在であることを意識し、レッスンをを行う姿勢が求められる。

模擬レッスンにおける学生からのコメントには、ピアノ指導コース学びのシステムで育てたい6つの力(①ピアノ指導技術、②ピアノ演奏技術、③ピアノ教材知識、④コンサートの企画・運営、⑤コミュニケーション力、⑥言語表現力)の幾つかと符合するものが見受けられた。特に顕著だったのは⑤のコミュニケーション力、⑥の言語表現力についての見解が寄せられたことである。加えて良い点のコメントには①ピアノ指導技術、②ピアノ演奏技術、③ピアノ教材知識についての言及があった。つまり指導者は十分なピアノ指導技術、演奏技術を習得した上で、円滑なコミュニケーションを取りながら、対象者にとって効果的な伝達方法でレッスンを展開することが必要であることを、受講生たちは模擬レッスンを通して感受したのである。模擬レッスンにおける学生の様々な気づきと本コースで育てたい6つの力に共通項が見いだせたことで、他者の模擬レッスンを観察してコメント表を記入する授業実践法の有用性が明らかになったといえる。

最後に今後の課題を述べる。本授業の模擬レッスンで得た示唆を、実際に指導実習(スクーリング)の場で幼児にピアノレッスンを行う際、どのように活用していったらよいか、さらなる検討を図りたい。

註

- (1) 丹羽裕紀子(2019: 141)「幼児を対象としたピアノレッスンにおける即興指導」『名古屋市立大学人間文化研究』32.
- (2) 神原雅之(1999: 133)『音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—』溪水社.
- (3) 進藤郁子、堀江志磨、近藤伸子、濱尾夕美、大島優子、山内のり子(2016: 289)「国立音楽大学におけるピアノ指導者養成」『国立音楽大学研究紀要』50.
- (4) 同書(2016: 290)
- (5) 同書(2016: 292)
- (6) 筆者が当授業を担当した2017年度のシラバスより引用した。

参考文献

Dorothy T. McDonald and Gene M. Simons

1989 *Musical Growth and Development: Birth Through Six*. Schirmer books.

1999 (日本語訳)『音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—』神原雅之他(訳): 溪水社.

神原雅之

2014『幼児音楽教育要論』開成出版.